富士学研究
Journal of Fujiology
Vol.7, No.2 pp. 21 - 38 2010

明治 35 年京都探遊会の富士登山，100 年後の足跡を辿る

畠 堀 操 八，土 田 純 子*

Retracing the Mt. Fuji climbing route taken by KYOTO TAN-YU-KAI in 1902

Souhachi HATAKEHORI & Sumiko TSUCHIDA*

キーワード：富士山，村山古道，お鉢巡り，100 年前の登山風俗，明治の写真
Key words：Mt. Fuji, MURAYAMA KODO, an ancient Mt. Fuji climbing route, OHACHI-MEGURI, Circling around the crater wall, Climbing style a hundred years ago, Old photographs in the Meiji period

１．はじめに

明治 35 年（1902）8 月初め，京都探遊会の 14 人が富士登山を行った。現存するキャビネ判 25 葉の写真（図 1）[1] によると，鈴川停車場（現・吉原駅）に降り立った一行は名所旧跡見物をしながら官幣大社浅間社（現・富士山本宮浅間大社；以下「浅間大社」と略称）に参詣，翌日もさらに人穴まで往復して大日堂（現・冨士山興法寺大日堂と富士根本宮村山浅間神社）に至り，村山古道を経由して頂上の浅間大社奥宮まで登り，さらに頂上のお鉢巡りをしたあと須走口に下山して帰京している。今回この全行程を辿り，100 年前の山麓の風俗と富士山の姿を現状と比べ，これを撮影したカメラマンの謎に迫ってみた。

〇「富士登嶽團」（図 2）：浅間大社拝殿正面での参拝記念写真。一行 14 人と篠懸（すずかけ）姿の修験者 1 人，3 人の神主らが写っている。右の向拝柱に《富士登嶽團　京都探遊會　明治卅五年八月二日　為紀念大宮浅間社》と大書した紙を貼って写し込んであるいっぽう，

図 1　『富士登山写眞』

図 2　富士登嶽團
京都探遊會

浅間大社の社務日誌にも次の記録が残っている。
《八月二日雨夜大雨
一　午後五時比（ころ）京都探遊会員拾五名参拝ニ付神酒御供ヲ授与ス御拝殿向拝ニ於テ紀念ノ為写眞撮影致度旨願出為差許ス》[2]
『日誌』で「拾五名」としてあるのは，神社側では案内役の修験僧もメンバーの 1 人として数えたからであろう。

前列右端は，頭金（ときん）・篠懸を着用して右手に大錫杖を持った聖護院派の修験僧である。梵天（ぼんてん）（ぼんぼり）の色が不明なので階級は分からないが，一般には村山の池西坊淨連院・北畠栄鎮法印と言われている。ところが北畠家に伝わる位牌によると「浄蓮院殿正大先達賢者榮鎮法印・昭和 18 年 2 月 14 日・享年 86 歳」となっていて，そこから逆算するとこのとき 41 歳であるから，写真の僧は若すぎる。栄鎮法印の長男に嫁いだ北畠千恵子さんによると，面長であることは似ているのかもしれないが，印象には残っていないということである。ともあれこの修験僧はこれ以下「香久山」「河合橋」「浅間社」「大日堂」「馬返」の写真に登場する。登岳団の案内役を務めたようである。

なおこの修験僧が左手に持っている小旗には「京都探遊會」の文字と京都市の市章が染め抜かれている。このほか前列左端の人物が持っている大旗もあり，後に見るように鉄道馬車に掲げたり，宿舎の軒先に立てたりしている。また全員左胸にリボンを着

*NPO 法人シニア大樂山樂カレッジ
*Non-profit organization “Enjoy mountain!” club for seniors

け，斑蓋（笠）を持っており，斑蓋にも「京都探遊會」と墨書され京都市章が描かれている。「京都探遊會」という旅行会社があったのかもしれない。

さて道者（登山者）であるが，前列から判断すると，全員が地下足袋か素足に草鞋を履いて，脚絆を巻き，股引きスタイルである。当時はすでに作業用の履き物としてゴム底の地下足袋が販売されており[3]，滑り止めに効果のある草鞋と併用したものであろう。股引きは江戸時代以来の野行きの標準的なスタイルであった[4]。

もう一つ一行の服装で目を引くのはほぼ全員がワイシャツを着ていることである。当時のワイシャツは衿は後ろからとりつけるようになっていて，まだ既製品は出回っておらず，誂えであったはず。しかも国産木綿糸は太くてシャツ地には向かないため，インドから輸入されたギンガム木綿であろうと思われる[5]。しかも明治 13 年（1880）ごろから和服の下にワイシャツを着る風習が生まれ，とくに書生の定番スタイルであったという[4]。

上着についても見ておこう。前列右から 4 人目は縦縞の生地で前合わせが左に寄っておしゃれになり，胸ポケットが付いている。5 人目は藍染めの久留米絣を着てカフスの付いたシャツを着ている。中列右端は背広のように見えるが，後出の「香久山」，「馬返」の写真で見ると燕尾服である。中列 3 人目と 5 人目は背広を着用してネクタイまで締めている。7 人目は細かい亀甲縞の久留米絣であろうか。

このように見てくると一行は学生さん，京都のお金持ちのぼんぼんたちが，最大限のおめかしをして富士登山に臨もうという印象である。

前列右から 2 人目，泥鰌髭の人物はチョッキの上に木瓜紋の入った半纏をまとい，襷を掛けている。右手に双眼鏡を持っているので，団長を務めているのかもしれない。中列左端の人物は年配者なのでお目付役かもしれない。

後列 3 人は浅間大社の人物であるが，氏名は特定できなかった。この年，明治 35 年 7 月，鎌倉宮から転任したばかりの伊藤景裕氏が宮司を務めているはずだがこのとき満 54 歳であり，神主姿の人物とは思えない。また浅間大社には，歴代宮司のなかでも伊藤氏に限って写真が残っていないという。

左の木綿絣の人物は，半纏をまとって顔が日焼けしているので，境内で清掃などをしている作業員ではないか。

２．まずは岳南地方の観光

〇「京都探遊会富士登山地図」（**図 3**）：ここで当時の交通事情を説明しておきたい。東海道線が全通したのは明治 22 年（1889）で翌 23 年からは鈴川（現・吉原）・大宮（現・富士宮）の間に富士馬車鉄道が開通する。鉄道馬車が加島駅（現・富士駅）につながるのは明治 42 年（1909）で，これが富士身延鉄道の軽便鉄道になるのは大正 9 年(1920)のことである。

いっぽう御殿場馬車鉄道は，明治 32 年（1899）に御殿場の新橋停留場から須走停留場まで開通し，前年の 34 年（1901）には籠坂まで延伸して最盛期を迎えるが，翌々年の 36 年（1903）には中央線が甲府まで延びて大打撃を受け，その後は路線を短縮しながら，昭和 3 年（1928）まで細々と運行を続けた。なお昭和 9 年（1934）に丹那トンネルが完成するまでは現在の御殿場線が東海道本線であった[6]。

〇「香久山」（図 4）：吉原の毘沙門天として有名な日蓮宗香久山妙法寺の境内で，現在の第一駐車場の上のあたり，新造の石灯籠がほぼ同じ位置に立っている。

《元吉原　今の吉原駅初めはこゝにあり。砂山地蔵・香久山妙法寺といふ日蓮宗の寺あり。又毘沙門堂あり。此の尊像は聖徳太子の御作にして長八尺，肩上に聖徳王の尊像立ち給ふ》[7]

写真の手前が太子堂，その向こうは当時は僧侶の

図 3　京都探遊会富士登山地図

図 4　香久山

住居れ，願満堂となって朽ちるにまかせてある（図5）。屋根は北面の入母屋造りから，東面の切妻造りに変更され，向拝柱も木肌が新しいので後補のようであるが，向拝桁前面の彫刻，両端にある桁隠しの彫刻，向拝桁の上に置かれている彫刻はそっくり残っている。

この写真は，写真帳ではトップに置かれており，鈴川停車場で降りた一行が真っ先に訪問した場所と考えられる。曇っているので正確な時刻がわかりにくいが，朝早くとか夕暮れの光線ではない。当時の鉄道時刻表によれば京都・鈴川間の直通列車は1日3本あり，鈴川発18時34分，02時40分，11時44分とあるから（時刻表からは着時刻はわからない），一行は前夜12時07分に京都を出発して昼前に着いたものであろう[8]。

〇「河合橋」（図 6）：徳川家康が慶長 6 年（1601）に五街道整備をはかり，吉原湊を渡船で渡っていた東海道を元吉原から北に曲げて内陸ルートに変更した，このとき以来の沼川を越える交通の要衝である。享保年間（1696～1736）に書かれた『田子の古道』に橋の諸元が記載されている。

《今の河合橋廿六間，巾三間のらんかん　板橋懸りて》[9]

現在は静岡県道 171 号吉原停車場吉原線で長さ 56.4m，幅（車道）7.8m，1951 年架設の鉄筋コンクリート構造T桁橋で，68 年に長さ 56.35m，幅 1.50m の人道橋が上流側に併設されている（図 7）。この橋が有名なのは，晴れていれば橋の向こうに富士山がそびえて見えるはずで，このアングルの絵はがきは筆者が知っているだけで 10 数種類ある（写真 8）。

またこの写真が有名なのは，橋の上を馬車鉄道が走っているためで，人車の後ろを 2 両の貨車が進んでいる図柄で，多くは出所不明の写真として流布している。なお子細に見ると，人車には京都探遊会の旗が掲げられ，案内役の篠懸姿の修験僧が先導している，なかなか込み入った構図である。

〇「水門橋」（図 9）：古来この地は富士山麓の低湿地で，海岸の自然堤防の内側は米作農業も成立しないほどであった。

《沼川ハ富士愛鷹ノ谿谷ニ発シ，富士沼（浮島沼）ヲ併セ西流，三股ニ至リ南流，前田新田ノ東端，鈴川ノ西境ヲ経テ田子浦海ニ入ル，遠表（えんぼう）二里，流末ヲ吉原湊ト云フ。地勢平坦，川流遅滞，昼ハ以テ富岳ヲ浮べ宵ハ以テ星辰ヲ宿ス，奇観壮麗其勝比ナシ，然モ南洋風波ヲ起シ怒濤狂奔，潮汐逆流ノ日ニ方（あたり）テハ禾稼（かしょく）朽腐患害于頃，悲鳴野ニ満ツ》[10]

地元民悲願のこの石水門が完成したのが明治 18 年（1885），静岡県で初めてコンクリートを使った近代土木の粋として観光の対象であった。

現在ここは北側・上流から，岳南鉄道沼川橋梁（単線），ＪＲ東海道本線沼川橋梁（複線），サイホン式パイプライン，沼川水門橋，沼川橋が渡されていて，それら全体を南北に沼川橋跨線橋という円弧状のバイパスが跨いでいる。かつての水門橋はいちばん海側の沼川橋の位置にあったようで，西詰めに記念碑が建てられている。今日，水門橋の役割は 2 番目の

図 5　いまの妙法寺願満堂

図 6　河合橋

図 7　いまの河童橋（2009/2/11）

図 8　絵はがき（富士勝景）
鈴川河合橋ノ景

図 9　水門橋
（1902，奈木盛雄蔵）

図 10　いまの沼川水門橋
（2009/9/1）

沼川水門橋が果たしている。20m の 2 連，幅員 7m で，ふだんは東に向かう 2 車線の自動車専用道路となっているが，いったん高潮が押し寄せてきたときには，橋面の上流側に回転軸があって海側がじわりじわりと下がっていって，河床に達して海水の逆流を塞ぐ仕組みである（図 10)。「橋梁一体型可動式ゲート」というそうである。明治の水門橋は昭和 41 年（1966）にその役割を終えている。写真の右に見える長い稜線は，愛鷹山である。

〇「曽我神社」（図 11）: 鈴川停車場（吉原駅）から鉄道馬車で出発した京都探遊会の一行はそのまま大宮（富士宮）まで直行しないで，途中下車して「曾我神社」に参拝している。ここは源頼朝の富士の巻き狩りに斬り込んで，敵討ちを果たした曽我兄弟を祀ってある神社である。兄弟の墓は近所の曽我寺にあり，神社のほうは市販の地図では「曽我八幡宮」と記載されている。社前に立つと，現在でもそっくりそのまま 100 年まえの石段が残っているさまに驚かされるが（図 12)，細部を見ると，いくつもの変化が見られる。

石段は 6 段から 8 段に増えている。しかし踏み段の歪みや蹴上げ面の石の継ぎ目を見比べると，上から 6 段分は明治のものがそのまま保存されていることがわかり，下の 2 段が左右の側壁とともに後補されている。何らかの理由で手前の地面が 50cm ほど低くなったようである。

石段両脇の石垣スロープは，後補と思われる新しい石もいくつか象嵌されているが，ほとんどの切り石がむかしのままなので，石垣全体はほぼ古いまま保存されているとみなしていい。もっとも最下端の石段 2 段分は後補であり，向かって左側スロープの左端は，その左の自動車道造成のときに削り取られたものと考えられる。この自動車道はゆるい傾斜で鳥居の立っている中段に上り，参道を横切って，右側に抜けている。

現存する石段下の両側の石が，当時からあったものかどうか，写真だけで判定はむずかしい。ただし両方とも上面に臍穴とも思える凹みがあり（左右ともに 11×11×8cm)，かつて鳥居が立っていた礎石かもしれない。石灯籠はこの 100 年のあいだに幾多の変遷を受けている。

竿（土台）は，左右とも凝灰岩らしい自然石の上部をちょん切って利用したもので，明治の写真の石の表情がそのままいまでも残っている。なお左の竿には文字が陰刻してある。《寶前燈　寛政四〔1792〕壬子五月廿七日　仁科精左衛門》[11)]

中台（土台の上の正方形の板）は，明治の写真では左右とも下辺に飾りの溝が彫ってある。今日では左は飾りの溝もそのまま残っているが，脆い頁岩のためかボロボロに剥落している。右は小さい泡粒のある緻密な玄武岩製で後補である。

その上の火袋は，明治 35 年当時は両方とも存在していなくて，中台のうえに笠がじかに載っている。これでは灯籠としての意味がない。今日では左右ともに粗い泡粒のある玄武岩製のほぼ完全な立方体をした火袋があり，前後に円形の窓があり，左右に正方形の窓が開いている。同時期に新造・後補されたものであろう。

笠は，左が火袋と同じ岩肌の玄武岩製の後補であるが，一体としてつくられたはずの擬宝珠は欠損している。右は泡粒が少ない玄武岩で，旧来のものが残っているようだが擬宝珠の後ろが欠けている。なお，右の石灯籠のすぐ後ろにかなり破損した笠が置かれており，材質・形状から見てもともとは左の灯籠の笠であったと思われる。

左の石灯籠のすぐ後ろに伊豆石の凝灰岩と思われる石柱が建っている。表面には《孝子曽我之祠》と陰刻してあり，裏面には修復の経緯が陰刻してある。《孝子曽我士之祠結構不完修理不果而卒／于茲聊甚遺志矣先考與市嘗慨之口加／于時明治十八〔1885〕年一月一日／大宮町　角田鍬太郎　風従書》[11)]

鳥居は，明治 35 年写真では笠木（屋根）付き木製

図 11　曾我神社（1902，奈木盛雄蔵）

図 12　いまの曽我神社（2009/2/11）

の明神型で，右手前に小柱がある。額束（がくづか）には何も書いてないように見える。現在の鳥居は白い御影石製で，神額が掛かっており，《曽我八幡宮》と陽刻してある。左の柱の裏側に《大正十四年〔1925〕五月二十七日》，右の柱の裏側に《静岡県庵原郡袖師村峯／井出卯之吉　奉納》[11]と陰刻してある。明治 35 年写真の 23 年後に改築されたものであることが分かる。

現在の御影石鳥居のすぐ後ろに左右 1 対の台形の礎石があり，右礎石の手前には円形の礎石が残っていて，いずれも臍穴が彫られている。臍穴は，後ろ側は左右ともに 8cm 四方で深さ 5cm の立方体，手前の礎石は上面を削った自然石で直径 26cm，深さ 12cm の円筒形である。明治 35 年写真にある木製鳥居は，現在の御影石鳥居の 1m 後ろ，これらの礎石の位置にあったものと思われる。

なお社前に富士市教育委員会名で説明板があり《天保二年（一八三一），雨宮丹後守守弘が社殿を現在地に移し》とあるが，以上の解読碑文をいただいた谷本洸氏によると，それは寛政 5 年（1792）のことであると指摘をいただいた。

《曽我八幡宮社殿を第七代雨宮守弘は己が屋敷内へ古宮より奉遷鎮座六百年記念大祭執行。現社殿の場所》[12]

〇「御手洗水源」（図 13）：浅間大社の湧玉池である。当時は実生の灌木など生えるに任せていたようであるが，今日では岸辺が整備されて小ぎれいになっていて，のちに勧請された稲荷社あたりからの撮影である（図 14）。

〇「浅間社」（図 15）：浅間大社の拝殿と，奥に本殿の屋根が見える。当時は茅葺きのものが今日では檜皮葺きになっており，平成の大改修によって破風の装飾など改変されているが（図 16），建物の構造や屋根の流れ，向拝の彫刻などは基本構造は残っているようである。本殿の堅魚木は 2 本（ないし 3 本）のものが今日では 6 本になっており，歴代の写真を見ると幾多の変遷を経ているようだ。背後の杉の大木群は昭和 33 年（1958）9 月の鹿野川台風のとき倒壊している。

拝殿に懸かっている門幕には，左「奉納　明治二十九年十一月三日」，右「富士山表口　休泊強力営業村山部　村山浅間神社氏子有志　中」と書かれている。明治 29 年（1896）は社格が官幣大社に昇格した年であり，11 月 3 日には勅使を迎えて奉告祭が行われている[13]。

〇「大石寺」（図 17）：日蓮正宗総本山は大石寺境内のいちばん奥・奉安堂の手前（南）にある静岡県有形文化財・御影堂（みえいどう）である。

《俗に御堂（みどう）と呼んでいる。嘉慶 2 年（1388），6 世日時上人の時，越前法橋快恵の謹作による宗祖大聖人等身の御影が安置されている。初め大永 2 年（1522）12 世日鎮上人によって小御堂が建立され，寛永 9 年（1632），阿波徳島の城主蜂須賀至公夫人敬台院の寄進によって再建造営された》[14]

この御影堂は創建当初は茅葺きだったものが元禄年間（1688～1704）の改修で檜皮葺きとなり，この年（明治 35 年）春，写真に見るような銅桟葺きとなった。4 月 22～24 日に「立宗六五〇年記念事業御影堂大営繕」の落慶法要がおこなわれたばかりで[15]

図 13　御手洗水源
（1902，奈木盛雄蔵）

図 14　いまの湧玉池
（2009/4/18）

図 15　浅間社
（1902，奈木盛雄蔵）

図 16　平成大改修後の浅間大社
（2009/4/18）

図 17　大石寺御影堂
（1902，奈木盛雄蔵）

図 18　改修にとりかかるまえの御影堂

まだ工事が完全には終わっておらず，手前左には足場，右には残材が残っており，中央に敷かれているのは作業用の筵のようである。

その後《昭和 46 年（1971），66 世日達上人により，大改修が施された。この時，堂内の金箔の丸柱，御宮殿，彫刻等も改修が加えられ，寛永 9 年造立時の荘厳華麗のままに復元した》[14]が，銅桟葺きの大屋根の構造や向拝の基本的な結構は維持されてきたようである（図 18）（撮影年月日不明）[14]。

写真を見比べて外見上の大きな違いは，手前の石段が 11 段から 14 段へと改造されていることである。当時の蹴上げ（段差）はそうとう高く，段数を増やして上りやすくしたのであろうか。石段の下から 4 段めの蹴上げ中央の御影石に陰刻されている。

《寄附主　東京　内山ワカ》

この人こそ，「自分は踏まれても信徒のみなさんに楽に登ってほしい」と願ってこの石段を寄贈したと伝えられている。時はまさに《皇紀二千六百三年十月二十八日》[16]，昭和 18 年（1943）のことである。

もう一つ景観上の大きな違いは，右手の目通り幹周り 4m は超えようという大杉がなくなっていることである。いつ倒壊したかはいまのところ不明である。今日ではそれなりに立派な楠の大木が枝を広げているが，かつての老杉の迫力には比べようもない。

この御影堂については 2006 年から構造的な大修復が始まった。学術調査をしながらすべて解体し，再利用できる材はすべて使いながらふたたび組み立てていこうという大事業である。そのため今日ではパネルで大きく囲われていて（図 19），ここしばらくは手前の石段しか目にすることができない。7 年間掛けての大改修のあと，どのような偉容を現すのであろうか。

〇「駒止桜」（図 20）：狩宿の下馬桜，日本五大桜の一つで国指定特別天然記念物。建久 4 年（1193），源頼朝が富士の巻き狩りのさい立ち寄って馬をつないだと言われている桜である。この写真は乾板の引き蓋を引ほぼ同じアングルからの写真が残っている（図 21）[17]。かつては目通り 8.5m といわれたシロヤマザクラもたびかさなる台風などにより損傷し，往時の勇姿はない。しかし，背後に見える井出家高麗門と長屋の結構はそっくり残されており（図 22），近世上層農家建築の技術を伝えているという。

〇「白糸滝」（図 23）：高さ 20m，幅 200m にも及ぶ滝で，本滝の一部を除いて，溶岩層を通った富士山の地下水が岩の隙間から流れ落ちているといわれている。この年は雨の多い夏だったようで，水量が豊富である。しかしその後，崩落と後退を繰り返し，かつて芝川の本流が流れ落ちていた左側の水平で幅広い落ち口は抉れて，見る影もない狭い滝になってしまった（図 24）。芝川は一級河川でありながら白糸滝部分は国立公園区域に入っているため[18]，滝の管理が複雑に縦割りになっているらしく，滝の崩落・後退について公的な記録ははっきりしない。一部確認できないところも含まれているが，富士宮市観光協会提供の資料[19]によると，つぎのような崩落が記録されている。

図 19　改修中の御影堂
（2009/5/26）

図 20　駒止桜
（1902，奈木盛雄蔵）

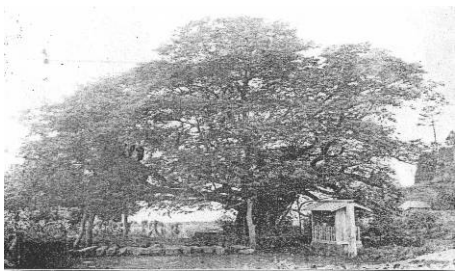

図 21　明治 39 年の下馬櫻

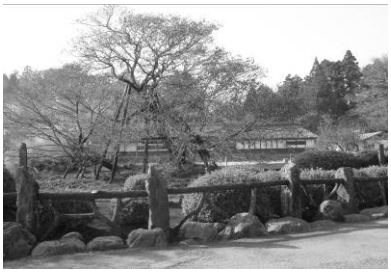

図 22　いまの駒止の桜（2009/9/31）

図 23　白糸滝（1902，奈木盛雄蔵）

図 24　いまの白糸滝（2009/9/31）

大正 12 年（1923）9 月，関東大震災によって左岸（向かって右側）斜面崩壊。

昭和 36 年（1961）6 月，豪雨により右岸滝見茶屋の奥のオーバーハング部分が崩落。

昭和 49 年（1974）6 月〔7 月？〕，七夕豪雨による増水で主滝崩落。

昭和 58 年（1983）5 月，降雨と強風のため左岸の大木が倒れ，千鳥屋前の土砂が崩落（現在ネットが張ってある）。

平成 18 年（2006）年，左岸法面の崩落。

平成 21 年（2009）年 3 月，主滝の自然崩落。

〇「人穴」（図 25）：奥行き 90m に及ぶ溶岩洞穴と《人穴の内部や周辺部には，現在二二三基の碑塔が確認されて》[20] おり，富士講の開祖・藤原角行の修行の地，あるいは入寂の地として富士講の聖地とされている。写真は洞窟の入り口で，右側の入ったところの天井がちょっと崩落しているていどで，外から見た鴨居部分は溶岩流のでこぼこが 100 年前とまったく変わらない（図 26）。ガクアジサイ，ヤマブキショウマなど生えている植物も 100 年前と同じである。今日でも洞内では扶桑教によって祭祀が営まれているようだが，入り口にある人穴浅間神社は人穴集落の氏神である。

3．村山古道を登山

〇「大日堂」（図 27）：富士根本宮村山浅間神社と並んで建っている冨士山興法寺（こうぼうじ）大日堂である。興法寺は 12 世紀半ば，末代上人の創建とされる。

《其ノ身ハ猶モ彼ノ岳ニ執心〆，麓ノ里ニ村山ト白（まふ）ス所ニ地ヲト，伽藍ヲ営，肉身ヲ斯ニ納テ，大棟梁ト号〆，当山ノ守護神ト現レ玉フ》[21]

富士山大縁起ニ興法寺ハ末代上人ノイトナム所……大棟梁ト号シ，此山ノ守護神トナルト云ヘル社，今ニ村山浅間ノ傍ラニ，大棟梁権現ノ社アリ。村山ノ三坊ノ山伏，辻之坊ハ浅間社，池西坊ハ大日堂，大鏡坊ハ大棟梁権現ト分ケテ別当ナリ》[22]

嘉永 4 年（1851）に書かれたという『富士山表口南面路次社堂室有来絵図』（村山浅間神社蔵）によると，境内の中央に大日堂があり，左（西）に七社浅間と拝殿，左に冨士大権現と拝殿，奥に東照大権現と行者堂が並んでいる（図 28）[23]。

この大日堂には明治初年の廃仏毀釈で山中の仏像を閉じ込めて封鎖されたこともあるが（図 29）[24]，明治末のこのときには間の柵も取り払われて，村山修験が復活していることがわかる。今日では茅葺き屋根にトタンが被せてあるが，江戸末期に建立されたもので村山に残るもっとも古い建物である。手前の石垣は石組みの一つひとつが 100 年前と変わらない（図 30）。向こうの石段は改修されている。

なお手前の僧衣・袈裟懸けで扇子を持った人物について，孫に当たる秋山和珍氏は，聖護院法印・2 代目大宝院秋山寿芳氏と考えてまちがいないだろうと言われている。100 年前の写真で氏名が特定できたのは，この 1 人である。

図 25　人穴（1902，奈木盛雄蔵）

図 26　100 年前と変わらない人穴

図 27　大日堂（1902，奈木盛雄蔵）

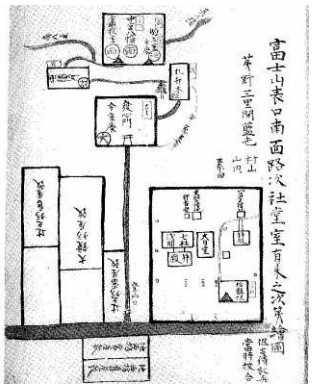

図 28　南面絵図

図 29　神社（向こう）から隔離された大日堂

図 30　いまの大日堂

また 1 人置いて立っている女性であるが，下駄履きなので近所の人，仕事着である前掛けをし，帯でなく三尺をしめているのでお嬢様でない，近くの茶店の従業員ではないかというのが衣装に詳しい人の評価である。とすると，今日山本商店のほかは野菜の無人販売しかない村山にも，当時は茶店のようなものがあったのかもしれない。

さて村山浅間神社の西のはずれが六道坂，いよいよ富士登山の始まりであるが，手前左に 1 人，中段中央に 2 人，上段に 1 人の京都探遊会のメンバーが写っている。いずれも金剛杖にずだ袋スタイルである。右の石段を上っている大荷物の 3 人は強力であろうか。

〇「馬返」（図 31）：村山古道の標高 1250m，中宮八幡堂があった。前掲の『富士山表口南面路次社堂室有来絵図』（図 28）[23] によると，「中宮八幡」「駒立室今廃」「金剛杖室」とある。

《中宮馬返しとも言われ，村山より派遣された社人が常駐しており，登山者の総ては，ここより馬で登ることは許されなかった。……天文年中（千四百年代）今川氏輝によって創建されたといわれ，祭神は八幡大菩薩（応仁天皇）が祭られている。明治三十七，八年までは茅葺き屋根の社屋，馬立小屋，杖小屋等が存在していたが，村山登山道の衰微により倒壊してしまった。当時，登山期には，村山より出張った堂守の社人が付近の山中より切り出した雑木で作った杖を登山者に交付した》[25]

まさに 100 年前のようすが書かれているようだ。

写真では，正面の建物の幟ふうの布に「富　表　山休　業　合資会社」と途切れ途切れに読める。

《また数十歩して茶屋あり。元の馬返の所なりと言う。その門口には風呂桶程の大桶を置き，屋根から雨水を取って飲料としけるが，その不潔なる事一見して閉口する……八幡堂に富士登山宿泊合資会社の宿泊券をひさぐ》[26]

明治 35～36 年ごろの情景だと解説してある。ところが写真の 4 年後の明治 39 年（1906），大宮（現・富士宮）から表口四合目（現・新六合目）に通じる新登山道が完成して村山口登山道は廃道になる。

《隆盛を誇った表口村山登山道は，大宮口新道のまえに潰滅し，山中には一棟の室も村山の人は持って居ない》[27]

その後昭和 17 年（1942）10 月，ここを登った冠松次郎は書いている。

《大分古くなった二間四方位の堂が建てられてある。昭和三年八月二十三日落成，当時村山浅間神社の社司をしてゐた三井益穂氏の建立にかゝるものだ》[28]

《現在の八幡堂の祠は，平成九年〔1997〕篤志家のご協力を得て創建したもので，祭典は，毎年十月の最終日曜日に，村山登山道探索会と併せ行われている》[25]

今日では新造の小さな祠のほか，天保 4 年（1833）銘の太郎坊権現石塔 1 対，文化 14 年（1817）銘の首なし地蔵が残っているにすぎない[23]。いちばん手前の石段・石垣はかろうじて明治時代の面影を残しているようである（図 32）。

〇「三合目」（図 33）：村山古道の標高 2390m，旧三合目石室で，村山を朝立ちして夕刻，たどり着いたものであろうか。

このころ《二合目には室なく三合目はあり，林尽きて一面禿山なり》[26] という。

この写真のカラマツ幼木の様子から，100 前はこの辺りが森林限界だったことがわかる。今日では森林限界は新六合目の上，2500m まで登っているので，森林限界は 100 年で 100m 登ったことになる[29]。今日では一帯は，盆栽のようなカラマツやダケカンバが特異な森林風景を見せ，石室跡には切り石がうずたかく積み重なっているだけである（図 34）。

〇「五合目」（図 35）：表口登山道の標高 2600m，旧五合目石室，向こうに宝永山が薄く写っている。

この写真の 5 年後の 1907 年（明治 40 年）8 月 3 日，旧制沼津中学 4 年生の和田実が開通 2 年目の大

図 31　馬返
（1902、奈木盛雄蔵）

図 32　いまの中宮八幡堂跡

図 33　村山三合目
（1902、奈木盛雄蔵）

宮新道を登ったときの細かな記録が残っている。

《一時半五合目の石室。少時にして発す，道益々けわしく焦砂はあかね色を帯び右手なる宝永山は之に黄をくわえたる色なり。青きは唯所々に落葉松の地をはうものあり。こは風雪に虐圧せられて，その高さ尺に満たざるも根幹は節くれて幾星霜を経たらんか。根を岩石に託して存するのみ，又イタドリの如き草をみるのみ》[26)]

今日は小屋跡は切り石が積み重なっているだけだが，左奥の斜面と登山道の右下は雪の吹きだまりになるせいか，ヤナギランなどが咲くお花畑になっている（図 36）。

なおかつてはここを，お中道が通っていた。

江戸時代後期のものと思われる『駿河國冨士山繪圖』[30)] によれば「五」と「四」の間をお中道が横切っており（図 37），明治時代初期の『冨士山表口正面圖』[31)] では「五」のすぐ下をお中道が通っている（図 38）。

《四合すぎて五合の室にいたる，此室は大なり，此所は中道めぐりといふ者も登山のものも宿る所なればなり》[22)]という記録もある。

今日でも地元の山小屋関係者はここを「お中道六合」と呼んでいるが，これは昭和 45 年(1970)にスカイラインが開通してからの呼称であろう。その後小屋の所有者が亡くなって経営を継ぐ者がいないので廃業し，山小屋組合で建物は解体したという。

〇「奥宮」（図 39）：表口登山道を頂上まで登ったところにある浅間大社の奥宮である。左奥の千木・鰹木を備えた木造・入母屋造りの建物が本殿で，妻入り（入り口は向かって右＝東向き）のようである。北側に風防であろうか，屋根の高さまで石垣が築いてある。写真中央の石室が拝殿（社務所？）であろうか。バックの山の形からして，頂上広場入り口の鳥居をくぐってすぐ左，今日の頂上富士館まえのベンチ辺りから撮影したものである（図 40）。撮影年次不明ながら昭和 18 年スタンプのある絵はがき写真によると（図 41）[32)]，本殿はそのままで，拝殿と社務所が今日とほぼ同じレイアウトになっている。

図 34　いまの三合岩屋跡

図 35　五合目（1902，奈木盛雄蔵）

図 36　いまの五合目跡

図 37　駿河國冨士山絵図

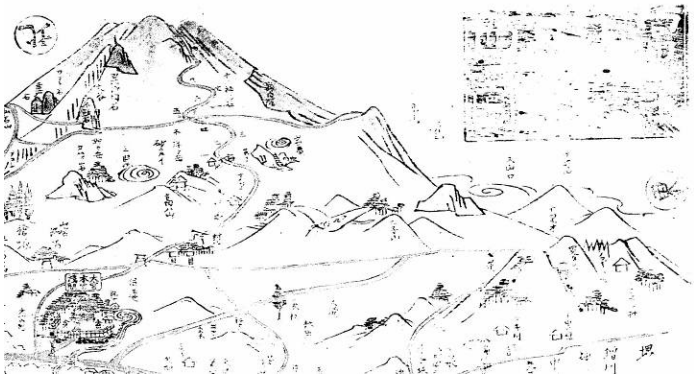

図 38　冨士山表口正面圖

図 39　奥宮（1902，奈木盛雄蔵）

図 40　いまの奥宮

図 41　昭和 18 年消印のある奥宮絵はがき

鳥居は笠木のある明神型から，絵はがきでは笠木のない神明型に変わってほぼ現在の位置に移動し，今日ではふたたび明神型に戻っている。

《頂上数歩にして鳥居あり，これに釣鐘がぶら下りて居る。此処で手洗水を呉れる。鐘を打て浅間神社奥の院に入る》[33)]

鳥居に吊るしてある鐘は，当時はこのように使われていたらしい。

前掲，撮影年次不明の絵はがきによると，この鐘はのちに鳥居から取り外されている。しかし竜頭の形状や袈裟襷文様から判断すると，今日でもこの鐘は奥宮に保存されている（図 42）。これには《浅間教會（庄）元講　明治廿三年六月造立》と陽刻されている。

この富士山頂の最古の建物は，断片的ながらつぎのような歴史経過をたどって今日に至っている。

《久安五年〔1149〕四月十六日丁卯，近日於一院〔鳥羽〕有如法大般若経一部書写事……是則駿河国有一上人。号富士上人，其名称末代。攀登富士山，已及数百度，山頂構仏閣，号之大日寺》[34)]

これが創建の記事である。

ついでこの写真の 70 年ほどまえにはつぎのような登山記録がある。

《頂に木の鳥居あり……其所に鐘はありけり，其所に石をつみて垣となしたる所あり，入て見れば是なん大日堂なり，かの本朝世紀に出たる末代上人の建しと云は此堂の事なり，今に村山の坊，此堂の別当なり……此所に石室三宇あり

頂上なる八葉内院と称せる洞穴，これ富士浅間大神の御座所とて詣る人毎に礼拝する所，其南の方に鳥居のたちたる所，村山大宮，須山口より登れるものゝ拝所なり，此ほとりに銅鉄の仏像大小あまたたてり，木石像もあり，鉄像大日銘曰，富士山興法寺辻之坊覚乗，明応四年〔1495〕五月廿六日，又銅像の大日の銘には大鏡坊云々としるしたるものあり，さいの川原なる観音の鉄像の銘，大宮司親時，明応二癸丑〔1493〕五月十六日と記したるもみえたり》[22)]

その 10 年後，1840 年代前半に描かれたとされる「大日社」は南からの俯瞰図で，正面に南面して大日社があり，その左右に八の字型に石室があり，さらに北向きの石室の屋根が見える（図 43）[35)]。

さらに 20 年のち，幕末に版行された登山案内掲載の「大宮口」頂上の挿図には「大日」のほか「石室」2 軒が描かれており（図 44），次の記述がある。

《表大日堂　駒ケ嶽を向ふへ下りたる所にあり

神変大菩薩　是ハ役行者之像にて大日堂の内にあり　別当ハ村山の山伏大鏡坊池の坊池西坊三人也村山大宮拝所　大日堂の前に室三ケ所あり》[36)]

しかし明治 7 年（1874）7 月，静岡県の役人・神官・宮司ら 18 人が村山口登山道を登っていった。

《同廿六日，今明日間ニ，富士山中佛像悉皆取除キ，元大日堂跡へ，浅間大神鎮祭致候事。但大日佛ハ，村山浄蓮院へ引渡シ，建物ハ金五拾圓ヲ以テ買請候事》[37)]

《即日元大日堂跡に浅間大神を鎮祭し，改めて浅間宮と称した。……かくて仏像・仏器の廃棄は，数日に亘りて行はれたのであるが，登山の道者等はたゞ茫然として為す所を知らなかつたといふ。但大日堂は村山浅間社の持であるから，大日像は之を同社に下附し，建物は本宮に買ひ取つたけれども，其他の

図 42　明治廿三年銘の鐘

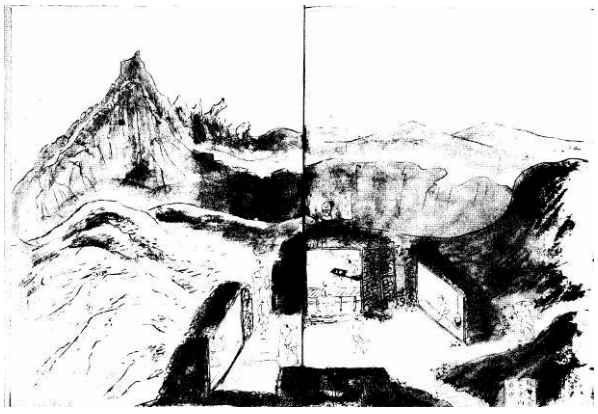

図 43　富士山明細図の大日社

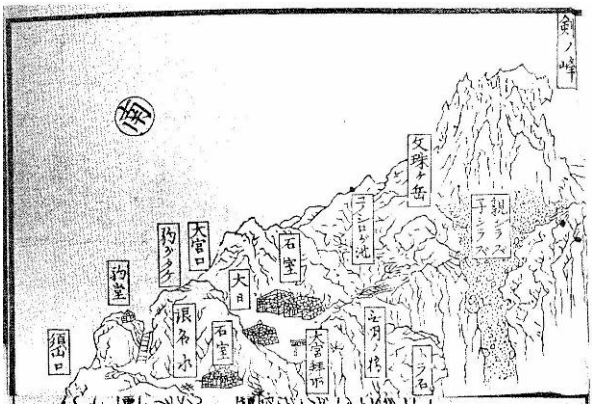

図 44　不二山道知留邉の山頂図

仏像等は如何に処分せられたのか詳かでない。而して此大日は後ち大宮町山中正吉氏の手に帰し，尋で同町の大頂寺に納められた。頂上の浅間宮はかくして建立せられ……明治十年〔1877〕三月二十一日本宮の摂社となり，尋で十三年〔1880〕七月十七日改めて奥宮と定めらる》[38]

４．お鉢巡り

〇「頂上お鉢巡り」（図 45）：頂上に到達した一行は，左回りでお鉢巡りを始め，写真の並び方から類推すると 1 周半して，須走口に下山したようである。

〇「銀明水」（図 46）：13 世紀初めに成立した『海道記』に《山の頂に泉あつて湯の如くにわくといふ》[39] とあるように，ふるくから金明水と並ぶ山頂の水場として知られていた。写真は御殿場口下山道入り口から南方を写したもので，向こう左端のギザギザの稜線が駒ケ岳である（図 47）。

1840 年代前半に描かれたとされる「銀名水・駒ケ岳」によると，広場の向こうに朱塗りの鳥居があって内院の《影拝所》，中央に石組みの井戸があって道者が 1 人覗き込んでおり，左に登っていくと梯子段があって，山頂が《駒ケ岳》となっている（図 48）[35] またその 20 年後に版行された『冨士山道知留辺』にはこの銀明水あたりについてかなり細かな説明がある。

《銀名水　須山の拝所を過て径一尺ばかりの井のごとき物あり　これハ旱天にも水のかるゝ事なしと是を銀名水と云　又須山口より登る者ハ此処へ出るといふ　八ツ子の階子　是ハ銀名水より駒ケ嶽へ登る階子なり　駒ケ嶽　　爰は上宮太子馬駒に乗りて憩息ありし旧跡といふ　銅馬堂　駒ケ嶽のかたハらにあり》[36]

さらに 40 年後のこの明治 35 年の写真には井戸のほか，梯子段，梯子を上ったところに祠のような建物，左の駒ケ岳山頂付近にも山小屋ふうの建物が写っている。どちらが銅馬堂であろうか。

明治 40 年に銀名水から駒ケ岳に向かった和田実は目撃している。

《続いて上宮太子登山跡に置きたる銅製の馬を見る》[26]

そしてさらに数年後にここを通過したと思われる登山者の記録がある。

《斧劈折帯，峻厳層累するものあり，駒岳なり。其の断岩に梯を掛くる所，小銅馬を安す。聖徳太子甲斐の駒に乗り，創めて此山を開かれし紀念なりと云ふ》[40]

つまり銅馬堂の中には小銅馬があったということになり，この小銅馬というのは先に見た写真（図 42）の左端に写っているものではないかと思われる。

今日では駒ケ岳手前ぎりぎりを左下から右上に回り込むように登山道が切り開かれていて梯子はなく，井戸跡らしい囲いは残っているが水は 7 月上旬にちょっと染み出すだけのようである。もともとは永久

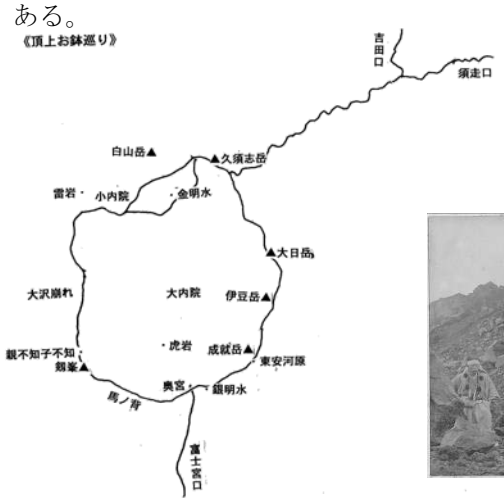

図 45　頂上お鉢巡り地図

図 46　銀明水（1902，奈木盛雄蔵）

図 47　いまの銀明水

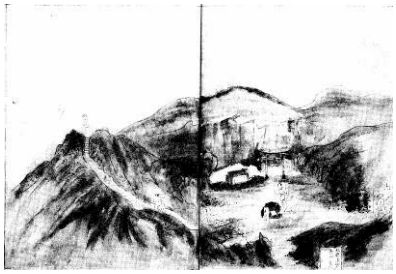
図 48　富士山明細図の銀名水・駒ケ岳

図 49　伊豆岳（1902，奈木盛雄蔵）

図 50　いまの伊豆岳

凍土の窪みに水がたまる地下構造だったらしく，夏になれば底支えが解けてしまい，春先に解けた地表近くの水はたまることなく火山灰の地底に抜けてしまうらしい。

なお明治の写真では，中央に京都探遊会の 2 人が左向きに写っており，左端には篠懸姿の修験僧がこちらを向いている。「馬返」まで同行した人物とは別人であるが，このシリーズ最後の「須走」の中央に写っている人物と同一人のように見える（図 72）。京都探遊会ご一行の案内人として，途中で交代したのであろうか。

〇「伊豆岳」（図 49）：廃仏毀釈以前は阿弥陀岳で，南から写したもの。フランスパンを斜めに置いたような山頂部は健在だが，今日では手前左側が大きく崩落している（図 50）。

《この東安の河原〔賽ノ河原〕から旭岳までの屋根（新巻と言う）は今尚噴火の余烟をもらし少量とは言へ硫黄の水蒸気立昇り，地殻は暖かくその岩間に生卵を置くと十五分で熱すと言う》[26)]

というのは明治 40 年の登山記であるが，今日このあたりに散乱している硫黄腐食した瓦礫はこういった火山活動のなごりかもしれない。

〇「久須志岳」（図 51）：吉田口・須山口の頂上，向こうのなだらかな斜面が久須志岳，廃仏毀釈以前の薬師ケ岳である。手前中央，右手に杖を持ち，左手に小旗を持っているのは京都探遊会のメンバーで，斑蓋（笠）と小旗が京都探遊会のものである。その右の斑蓋をかぶっている人物も仲間であろう。

右端（東端）は高さ 50cm，幅 1m ほどの石垣が積まれ，その内側が通路で，少なくとも 5 軒の石室が並び，一番奥，右端が久須志神社である。

石室に掲げられている幟（まねき）の文字は「神田亀井町　ヤマ吉」「神田三河町三丁目　マル笹」「日本橋　マル水」などと読める。明治 35 年当時，富士講による登山が盛んであったことがうかがえる。

古くは貞享 3 年（1686）に須走村名主・組頭が書き上げた「富士山諸役所小屋迄之書付」は北口頂上の賑わいをつぎのように伝えている。

《頂上の薬師嶽で，須走村の人々の小屋（石室）は餅・酒・湯・水の販売を行っており，その小屋は一六軒と賑わいを見せていた様子である。行合（八合目）より……頂上薬師嶽はそろって須走村の人々の営む小屋であったことが確認できる》[41)]

1840 年代前半の制作とみられる「頂上薬師ケ岳役場」には，頂上の建物の配置が細かな筆遣いで描かれている（図 52）。

《ここには薬師如来を祀る薬師堂が建っていた。……江戸初期にはすでに存在していたであろうと推測される。薬師堂は駿州大宮浅間社の所有であったが，その開扉封印は須走村浅間神主の職分とされていた。また，薬師堂には「岳役所」が併設され，登山期には大宮浅間社の役人が詰めていた。図中の薬師堂右隣の施設がこれである。……左隣の石室は……日蓮を祀った堂とされている。その隣には一二軒の石室が並び建っている。これらの小屋主は須走村の者で，道者を相手に湯粥を商っていた》[35)]

また万延元年（1860）に版行された『不二山道知

図 51　久須志岳
（1902，奈木盛雄蔵）

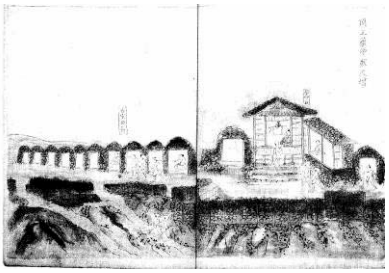

図 52　富士山明細図の頂上薬師ケ岳役場

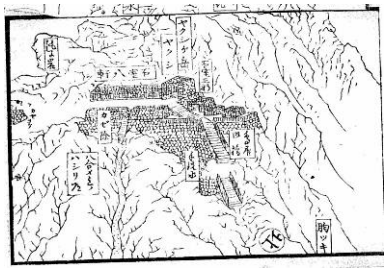

図 53　不二山道知留邉の山頂図

図 54　いまの久須志岳

図 55　昭和天皇富士山登頂（錦光館蔵）

留辺』には挿図があり（図 53），次のように記述されている。

《薬師堂　裏薬師ともいふて薬師ケ嶽にあり……

石室　薬師ケ嶽にならびて室十一ケ所あり〔以下11 人の小屋主名割り書き〕また此石室の前より吉田須走の拝所の前へかけ風除の石垣あり》[36]

薬師堂が久須志神社に置き換わった時期ははっきりしていない。さきに述べたように，明治 7 年（1874）7 月に頂上「大日堂」が「奥宮」に置き換えられているが，《思ふに薬師堂跡に大名牟遅命及び少彦名命を勧請して，久須志神社と改称せるも，亦此時であらう》[38] ということである。

今日では浅間大社末社の久須志神社と，山口屋支店，扇屋，東京屋，山口屋本店の 4 軒の石室，山口屋本店の隅に錦光館（写真館）がある（図 54）。明治のこのときには同じ間口の石室 7 軒があったとも，中央部に駐在所があったともいわれる。撮影日時のはっきりしている写真として，昭和天皇が皇太子時代に登頂したときの写真が残っている（図 55）[42]。

すでに見てきたように北口頂上に上がる部分は，江戸時代末期には石垣が築かれ土盛りがされていたようであるが，石室の玄関や通路が明治のままの位置であるとすればそれ以降，東側の急斜面に膨大な岩石を積み上げて今日の休憩広場やトイレの場所が造成されたものと考えられる。

なおまた，ここから白山岳（釈迦ケ岳）に向かうルートは，今日では久須志神社の手前を右に行けばいいが，往古は石室の南端から入ったようで，石室の背後（西）にルートがあったらしい。しかし背後の内院縁の崩落が進むにつれて今日の位置に移動したという。

〇「金明水」（図 56）：前出の銀明水と並ぶ山頂の水場である。井戸囲いや石碑は変わっているが，バックに見える白山岳の山襞はそのまま残っており，井戸そのものは昔と同じ位置にある（図 57）。

1840 年代前半に描かれたとされる「金名水」によると，《柄杓で汲んだ水を漏斗で容器に入れている二人の道者の姿が描かれている》（図 58）[35]。

またその 20 年後に版行された『不二山道知留辺』にも似たような説明がある。

《諸人竹筒あるひハ徳利へ汲とりて御水と称ふる》[36]

このように富士の霊水として富士講道者らは貴重な土産として汲まれ，ときには薬として使用されたほか，書家・画家からも珍重された。富岡鉄斎の名作，車折神社東軒文庫蔵の『不盡山頂上圖』にもつぎのように自筆で書き込まれている。《以頂上金明水寫之　大正九年七月廿日　鐵齋　八十五叟》[43]

筆者が 40 年ほど前に登ったときにはまだ湧水があったような記憶があるが，ぽたぽた落ちる水を各山小屋が時間制でバケツにためて使っていたらしい。しかしそれでは増加する登山客の需要に応えることができず，その後 50m ほど南の「内院」の岩壁途中の石清水からも水を集めるようになったが，登山客が下りて危険なために封鎖し，今日では「親不知子不知」から「内院」に向けて流れ落ちる大きな雪渓

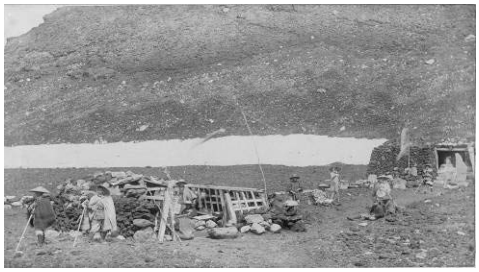

図 56　金明水（1902，奈木盛雄蔵）

図 57　いまの金明水

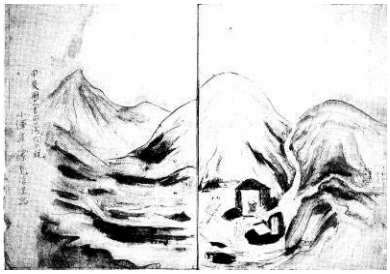

図 58　富士山明細図の金名水

図 59　親不知子不知
（1902，奈木盛雄蔵）

図 60　いまの親不知子不知

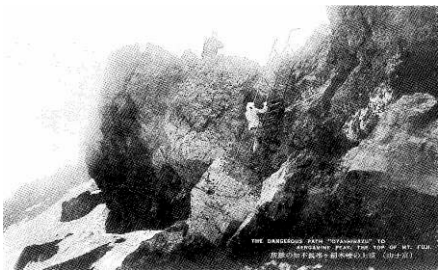

図 61　親知らず絵はがき

下部にできる水場の雪解け水を，ポンプで汲み上げて使っている。いまの金明水はそのための中継ポンプが設置されており，7 月上旬わずかに染み出すていどという。白山岳から南下していた永久凍土の上に形成されていた地下の渓谷が，融解して底が抜けたのであろう。

〇「親不知子不知」（図 59）：剣ケ峰のすぐ北側に続く岩の稜線で，北側から見上げるとそっくりのシルエットが確認できる（図 60）。1907 年（明治 40 年）8 月に登った旧制沼津中学 4 年生の和田実は，つぎのような記録を残している。

《これより「親知らず」にかかる。或は絶壁の中間を行くが如き所あり。或は塔の屋根を登るが如き所あり，剣ケ峰を下る所に一間位の崖あり。そこを一列で渡るのである。間を見て杖を捨て飛び降りる。その降りたる狭き所より富士大沢となりて，一旦脚を失すれば万に一生なし，強力は重き荷を担ぎながら，その沢頭に立ち，杖持ちてその危険な箇所を防ぎて，我等を飛び降らしめたるなり》[26)]

ここは例年大きな雪渓ができる吹き溜まりで，残雪の状況によって源頭部の通過地点に違いがあったようである。また撮影年代不明の絵はがきによると，鉄梯子が架けられたこともあるようだが（図 61）[44)]，現在はこの下にブルドーザーが切り開いたお鉢巡りのルートが造られている。

〇「剱峯」（図 62）：富士山の最高峰剣ケ峰のことである。野中至が剣ケ峰に気象観測施設を造ったのが，この写真の 7 年前のことである。撮影年不明の絵はがきによると，石垣を築いてわずかな平坦地を造り，岩の窪みを利用して石室としたようである（図 63）[45)]。

《剣ケ峰に気象観測室あり。ここは明治二十八年野中至氏の建造，約六坪のもので私費をもって運営した》[26)]

この写真の 5 年後に登頂した和田実はこのように書いているから，京都探遊会の一行は目にしているはずである。

富士山頂に公設の中央気象台臨時富士山測候所が開設されたのは昭和 7 年（1932），場所はこれまで見てきた「伊豆岳」と「銀明水」の中間に当たる東安

図 62　剣ケ峰
（1902，奈木盛雄蔵）

図 63　剱ケ峯野中観測所絵はがき

図 64　いまの剣ケ峰

図 65　内院
（1902，奈木盛雄蔵）

図 66　いまの内院

図 67　三合目
（1902，奈木盛雄蔵）

図 68　いまの須走砂払五合
（下り三合）

図 69　いまの旧登り三合

図 70　旧須走三合目
（『富士の里須走』）

河原であった。昭和 11 年（1936）にこの剣ケ峰に富士山頂気象観測所として移設，昭和 40 年（1965）にレーダードームが建設され，平成 13 年（2001）に解体された。現在は富士山特別地域気象観測所として，自動観測装置による気象観測を行っている（図 64）。最高峰の右（北）側に連なる岩稜が前項「親不知子不知」の難所である。

〇「内院」（図 65）：お鉢の南から北側を覗いたもの。手前右に京都探遊会の 1 人が写っており，向日正面の岩棚の雪田の右に「金明水」が見える。今日の写真では（図 66）大きな岩の塊が崩れ落ちている様が見てとれるし，すでに「伊豆岳」「久須志岳」でもみたように崩落が進んでいるようではあるが，この 100 年間，頂上噴火口の構造的変化はなかったようである。

５．須走口を下山

〇「三合目」（図 67）：25 葉のうち唯一場所が特定できていない写真である。須走口の砂払五合目を「下り三合」ともいったので一見ここかとも思えるが（図 68），吉野屋は 1950 年の新設である。登りの新六合目，現在の長田山荘（図 69）はかつては三合目であった（図 70）[46]。この下の二合五勺の小屋（いまは鳥居のみ）は昭和 30 年代半ばに雪崩で流されたというし，ここも 40 年ほど前はミヤマハンノキが生えているだけで小屋前から富士山頂が見えたというから，「三合目」の写真のように 100 年前は一木一草生えない砂礫地だったかもしれないが，溶岩流など周囲の地形が長田山荘の場所とは考えられない。砂走のなかほど，長田山荘から 100m ほどの高さに傾斜がややゆるんだ場所があるので（図 71），ここがかつての「下り三合」であった可能性もある。さらに調査をつづけたい。

〇「須走」（図 72）：東口本宮冨士浅間神社の正面，須走の街の中心部から西を写したものである。向こうの薄いスカイラインは籠坂峠から南西に延びる大根山の稜線で，晴れていれば中央部分から左上に向けて小御岳から上の富士山本体のシルエットが見えるはずである（図 73）。「米山館」は「ホテル米山館」として続いているが，「大米谷（おおごめや）」は今日の「松葉寿し」の位置にあった。導者宿に掲げる「まねき」の多さは富士講登山の隆盛を物語るものであるが，太平洋戦争によって完全に衰退したようだ。

ちょうどこの時期の須走の町並みを復元した資料があって，浅間神社の正面，東に延びる参道の両側に 88 戸の寺院や民家がならんでいる[47]。これで見ると旅館 3 軒のほか，大夫名を持つ御師の導者宿が 18 戸，住職 3 戸，神職 1 戸となっていて，江戸時代中期以降は富士講の登山口，弘法寺浅間宮の門前町として栄えた村である。ちなみに須走には水田が 1 枚もない。そのために交通労働も重要な産業であった。

《須走村の位置が信濃国・甲斐国より駿河国沼津や伊豆国三島・相模国小田原や大山への道筋となっており，馬の背を使った公用の宿継ぎの労働や……「馬舟」と呼ばれた荷車に馬をつけて商品輸送にあたったものである》[48]

《駿東郡御殿場より甲斐国南都留郡吉田村を経て甲府に通ずる街道は交通の頻繁なるも峻坂険路多く貨物の如き駄馬又は人肩にて運搬する有様にて不便此上なかりしが……去る明治二十九年株式会社御殿場馬車鉄道会社を創立志……客年七月起工し十一月に至り新橋より須走迄工を了へ先づ一部の開通を見るに至り》[49]

ちょうど鉄道馬車の最盛期だったことがうかがわれる[6]。

京都探遊会の 1 人が立っている後ろの「大米谷」に探遊会の大旗が立ててあるので，一行がここに宿泊したことは確かであるが，同宿は廃業して引っ越したため宿帳などの資料はまったく存在せず，探査の手がかりはここで途切れる。

６．カメラマンの謎

さてこれらの写真は，焦点距離 150～180 ミリの望

図 71　砂走り途中の棚

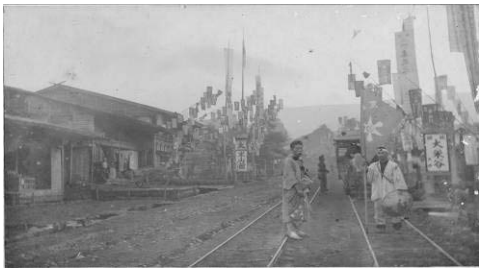

図 72　須走（1902，奈木盛雄蔵）

図 73　いまの須走

遠レンズで，1/4〜1/30 秒というスローシャッターで撮影されている。唯一の例外は冒頭に掲げた集合写真「富士登嶽團」で，これは無焦点レンズを使用し，蛇腹の煽りを利かせて前列も後列も同じ顔の大きさにしてピントが合わせてある。地元の写真館からの出張撮影かもしれない。

全体に水平の取り方がひじょうに優れている。若いカメラマンではないか。年配者になると老眼がアンバランスに進むから，たとえば右目の老眼が進むとカメラが左に傾きがちである。風景写真を撮り慣れており，人物配置がうまい。このように動きのある風景を，天地左右逆のファインダーを見ながら決めていくというのは，そうとう練達したカメラマンである。「駒止桜」の汚れは乾板の挽き蓋を引くとき一度ためらった痕である。職業カメラマンであれば，アンダー・標準・オーバーと同一アングルで 3 回シャッターを切るが，このカメラマンは 1 シーン 1 シャッターで決めている。25 点ぜんぶの写真が横位置であって縦位置写真が 1 枚もないというのも，このカメラマンの特徴の一つである。

さらに 1 枚 1 枚の写真の美的構想力と集中力が格段に優れている，図柄思想から見て，日本画の基礎素養があったのではないだろうか。

明治末に富士市に開業した写真館・錦光館当主の意見では当時，岳南地方にこれだけカメラマン（プロ）はいなかったはずという。しかもカメラ・三脚を始めとしてガラス乾板など周辺素材も含めるとたいへんな重量であるから，富士山を縦走するとなると助手の 1 人も連れていたであろう。出費もたいへんである。ということは京都探遊会が京都から連れてきたカメラマンの可能性が出てくる。

これまで各種ルートで京都方面に問い合わせてきたが，はかばかしい回答は得られていない。これからもおりを見て調べていくことにしたい。

7．結　語

数年前のことになるが，拙著『富士山・村山古道を歩く』[50] に奈木盛雄さん所蔵の写真を掲載させていただくお願いに，奈木家を訪れたのがそもそものきっかけである。各種貴重なコレクションを見せていただいたうえに,『富士登山写眞　明治三十五年八月』[1] 全体のコピーをお許しいただいたのである。スキャナーで取り込んだ画像は 07 年の富士学会報告 [29] でも使用させていただいたし，つい最近も富士山南斜面の原生林復活にかんする論考のなかでも活用させていただいた [51]。そのつど奈木さんからは，自分のコレクションが世のため人のために活用されることは嬉しいという使用許可をいただいており，奈木さんの広い心配りについては，学を志す者にとっての基本姿勢をたたき直される思いがしたものである。

ところでオリジナルは古くさい印画紙であるが，パソコンに取り込むとどうなるか。 たとえば「浅間社」の写真の門幕の文字は印画紙ではとても読めないが，ディスプレーの透過光で拡大して見ると楽々読み取ることができるようになる。そのほか人物の髭の形，着物の柄，ものによっては着物の素材，持ち物まで詳細に判別できることに気づいたのである。この『富士登山写眞』については奈木さん自身がすでに紹介をされており [52]，富士市立図書館では展示会も開かれているが（2002 年 7 月），あらためて写真全体の見直し，評価を行おうと思い立ったものである。

テーマからして一定の結論が出るものではないが，25 葉の撮影地点のうち現在地が確認できなかったのは 1 カ所のみである。1 世紀を経ながらそっくり残っているもの，改変・補修を受けながら残っているもの，見る影もなく廃墟になったもの，さまざまである。そこには，修験道登山，富士講登山，廃仏毀釈を経て国家神道の時代から今日のスポーツ登山，観光登山に至る歴史の断片が，重層的に見え隠れしている。筆者らにとって貴重で充実した調査の一年であった。この間得られた資料や証言は，質量ともにたいへんな重みを持っており，ことに最終段階で発見した膨大な資料群は未整理のまま手つかずで残されているので，今後のさらなる研鑽につなげていきたい。

謝　辞

奈木盛雄さんにお世話になったことは別格として，多くの方からじつに好意的で熱心なご協力を受けることができ，思いもよらない資料提供や証言，貴重なご意見をいただいた。たいへんな人数になるので，とりあえずは以下に，五十音順に列挙させていただいてお礼としたい（敬称略）。

會田梢（東京都国立市），秋山和珍（富士宮市），雨宮恒三（富士市），天羽直之（國華社），井出信子（富士宮市），岩見安博 ・文子（富士宮市・花月），植野孝雄（小金井市），遠藤岩男（富士宮市観光協会），遠藤秀男（富士宮市），大高康正（富士市立博物館），岡田麗子（京都便利堂），長田清一（須走口・長田山荘），長田岳士（京都市・思文閣出版），金子はるみ（川崎市），鎌田純子（國

華社），川口知（富士市・鈴川区管理員会），北畠千恵子（沼津市），小出由枝（京都便利堂），小岩井大輔（写真家），小松眞一（京都府写真師会），篠原武（富士吉田市歴史民俗博物館），菅沼利光（須走口・伊勢屋），瀬戸義文（須走口・瀬戸館），高橋堯薫（富士市・妙法寺），高橋堯昭（富士市・妙法寺），高村歌子（須走口・菊屋），谷本洸（富士市），外川徳一（須走口・吉野屋），永栄義親（富士宮市・大石寺寂日坊），永森謙（東京都・秦川堂書店），林守正（富士山頂・扇屋），平田大二（神奈川県立生命の星・地球博物館），福田徳郎（元朝日新聞出版写真部長），藤枝義久（田子の浦港管理事務所），松浦基治（富士宮市），三宅秀和（永青文庫），宮崎佳彦（富士山本宮浅間大社），望月岩雄（富士市・錦光館），山下忠告（田子の浦港管理事務所），米山千晴（須走口・東富士山荘），渡井正弘（富士宮口・宝永山荘），渡辺和博（富士宮口・萬年雪山荘），渡辺義彦（富士宮口・雲海荘）

写真サイズ

京都探遊会『富士登山写眞　明治三十五年八月』（奈木盛雄蔵）寸法

00	表紙	136×190×39mm，全体で 520 g
01	香久山	94×142mm（上辺），94×143mm（下辺）
02	河合橋	95×142mm
03	水門橋	94×143mm，飾り枠内 85×117mm
04	曽我神社	95×143mm
05	御手洗水源	95×142mm
06	浅間社	95×143mm
07	大石寺	95×142mm
08	駒止桜	95×141mm，飾り枠内 85×117mm
09	白糸滝	95×142mm
10	人穴	143mm，飾り枠内 87×117mm
11	大日堂	95×142mm
12	馬返	95×142mm
13	三合目	95×142mm
14	五合目	95×143mm
15	奥宮	95×143mm
16	銀明水	95×142mm
17	伊豆岳	95×142mm
18	久須志岳	95×141mm
19	金明水	95×143mm
20	親不知子不知	95×143mm
21	剱峯	95×142mm
22	内院	95×143mm
23	三合目	95×143mm，飾り枠内 86×117mm
24	須走	95×143mm
25	富士登嶽團	95×143mm

文献・注

1）京都探遊会『富士登山写眞　明治三十五年八月』奈木盛雄蔵.
2）『日誌』社第五拾六號，明治三十五年一月，淺間神社々務所.
3）「足袋の歴史番外編…地下足袋の発展」http://fpouch.fc2web.com/rekishi5.html.
4）青木英夫『下着の文化史』雄山閣出版，2000.
5）山脇悌二郎『事典 絹と木綿の江戸時代』吉川弘文館，2002.
6）森信勝『静岡県鉄道興亡史』静岡新聞社，平成 9 年.
7）秋里籬島『東海道名所図会』寛政 9 年，明治 43 年（1910）葵文会版，吉川弘文館.
8）新橋牧之助編『全国鉄道汽車発着時刻及賃金表』法木書店，明治 27 年.
9）富士市立中央図書館編『田子の古道』富士市立中央図書館，2007 年.
10）元吉原尋常小学校・柏原尋常小学校編『富士郡誌編纂資料　元吉原村誌』元吉原尋常小学校，大正 1 年
11)谷本洸氏の未公刊資料.
12）雨宮田鶴編『曽我兄弟』曽我八幡宮社務所，昭和 34 年.
13）『日誌』社第五拾號，明治廿九年一月，淺間神社々務所.
14）「日蓮正宗総本山大石寺写真集」http://www.asahi-net.or.jp/~je3t-wsi/index05.html.
15）『宗旨建立と七五〇年の法灯』大石寺，2003.
16）石段上の親柱に陰刻.
17）『冨士登山畫報』＝『近事画報』93 号，明治 39 年 7 月.
18）『富士箱根伊豆国立公園（富士山地域）区域及び公園計画図 2』関東地方環境事務所，平成 18 年.
19）遠藤岩男氏からの私信.
20）富士宮市教育委員会編『史蹟人穴』富士宮市教育委員会，平成 10 年.
21）『地蔵菩薩霊験記』，官幣大社浅間神社社務所編纂『浅間神社史料』官幣大社浅間神社社務所，昭和 9 年，所収.
22）河野道春著・新庄道雄補『駿河国新風土記』天保 1 年成立，天保 5 年補＝『修訂駿河国新風土記』国書刊行会，1975 年，所収，
23）富士宮市教育委員会編『富士山村山口登山道遺跡調査報告書』富士宮市教育委員会，平成 5 年，所収.
24）富士宮市教育委員会編『村山浅間神社調査報告書』富士宮市教育委員会，平成 17 年，所収.
25）現地の立て札より.
26）和田嘉夫編『昔の富士登山』和田嘉夫，平成 21 年.
27）赤野竹司編『富士山表口登山道　茂良山』富士山表口村山登山道保存観光資源化推進協議会，平成 5 年.
28）冠松次郎「富士の古道を行く」『富士山の旅』富士箱

根厚生文化協会，昭和 24 年.
29）畠堀操八「1 世紀で 100m－村山古道の森林限界上昇速度について」『富士学研究』Vol.5，No.2，2007 年.
30）冨士山別当表口村山興法寺三坊蔵板，富士市立博物館蔵，畠堀操八『富士山・村山古道を歩く』風濤社，2006 年，所収.
31）富士吉田市歴史民俗博物館編『富士山登山案内図』富士吉田市教育委員会，平成 12 年，所収.
32）遠藤秀男『懐かしの富士宮』羽衣出版，平成 21 年.
33）土屋重朗「明治三十九年富士登山の記－江島賤男自叙伝より」『駿河』駿河郷土史研究会，26 号，1975 年 1 月.
34）藤原道憲編『本朝世紀』平安末期成立，『淺間文書纂』官幣大社浅間神社編，昭和 6 年，所収.
35）小澤隼人筆『冨士山明細圖』『富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録「富士山明細図」』富士吉田市歴史民俗博物館編，平成 9 年，所収.
36）松園梅彦輯『不二山道知留邉　前編』青山堂，万延元年，『富士吉田市史　史料編』第 5 巻近世Ⅲ，富士吉田市史遍さん委員会編，平成 9 年，所収.
37）「浅間神社記録」『淺間文書纂』官幣大社浅間神社編，昭和 6 年，所収.
38）官幣大社浅間神社社務所編纂『富士の研究Ⅱ　淺間神社の歴史』古今書院，昭和 4 年.
39）源光行『海道記』貞応 2＝1223 年，玉井幸助校註『海道記・東関紀行・十六夜日記』日本古典全書，朝日新聞社，1951 年，所収.
40）静観道人著『富岳志』曾田文甫，明治 41 年.
41）小山町史編さん専門委員会編『小山町史　第七巻　近世通史編』小山町，平成 10 年.
42）大正 12 年（1923）7 月 27 日，錦光蔵.
43）笠嶋忠幸『鐵齋「富士山図」の謎』学生社，2004 年.
44）「（富士山）頂上の峻峯劔ケ峯親不知の難所」，富士吉田市歴史民俗博物館編『絵葉書にみる富士登山』富士吉田市教育委員会，平成 11 年，所収.
45）「富士山　劔ケ峰野中観測所」，同前書.
46）「東口三合目」，須走歴史研究会編『富士の里　須走』須走歴史研究会，平成 21 年
47）小野繁「百年前の須走の町並みを調べる」『富士山東麓　須走』須走歴史を学ぶ会，平成 3 年.
48）小山町史編さん専門委員会編『小山町史　第七巻　近世通史編』小山町，平成 10 年.
49）明治 35 年 1 月 25 日付紙名不明の新聞，須走歴史研究会編『富士の里須走』須走歴史研究会，平成 21 年，所収.
50）畠堀操八『富士山・村山古道を歩く』風濤社，2006 年.
51）畠堀操八「倒木と巨樹調査－富士山南斜面の原生林復活を」『グリーン・パワー』森林文化協会，2009 年 10 月号.
52）奈木盛雄「富士登山の写真」『駿河』駿河郷土史研究会，39 号，1983 年 3 月.

（投稿：2010/1/13　　受理：2010/10/15）